

研修会のお知らせ  
29 ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年2月1日発行

2014.2  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

2 号

第36巻  
No.295



ヤドリギ *Viscum album* L. var. *coloratum* Ohwi (ヤドリギ科 *Loranthaceae*)

**生薬**

ソウキセイ（桑寄生）冬に刃物で切取り、枝・葉を取り除き、熱湯を潜らせて陽乾する。

**成分**

oleanolic acid,  $\beta$ -amyrin, avicularin, meso-inositol, quercetin, lupeol 等。

**効能**

鎮痛、強壮薬としてリウマチ、神経痛、腰痛や産後の余病に煎じて服用。

生薬 ヤドリギ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇

ヤドリギ（宿り木）は読みの通りエノキ (*Celtis siaensis*)、クリ (*Castanea crenata*)、アカシデ (*Carpinus laxiflora*)、ヤナギ類 (*Salix*)、ブナ (*Fagus crenata*)、ミズナラ (*Quercus mongolica*)、クワ (*Merus australis*)、サクラ類 (*Prunus*) などの落葉樹に宿る常緑の半寄生植物で、葉が落ちた冬枯れの枝に緑色をした団塊状の株が垂れているのを見かけることができます。

繁殖法は実が変わっています。初冬、食べ物が少なくなる頃に実る果実はかなり甘く、キレンジャクやヒレンジャク、カラスなどが好んで食べますが、果肉が消化される以外は種子を取り囲むセルロースおよびヘミセルロース性の多糖類よりなる白い筋状の部分や強い粘着層は消化されず、排泄時に白い筋状の部分が高く伸び、粘着部と緑色の種子が膨らんだ部分になり連珠状に垂れさがるのを目撃されています。連なった種子が風などで幹に付着すると、その春には発芽が始まります。発芽が始まっても主根を伸ばすわけではなく、胚軸の下部が吸盤状に変化し、固着し、次いで不定根を生じて樹皮内に侵入するそうです。このことは中国の古い本草書『蜀本草』（韓保昇934-965）にも詳しく著されています。「諸樹に多く寄生があつて、茎、葉はいづれも似寄つたものだ。これは烏や鳥がある物の子を食ひ、糞を樹上に落し、それで気が感じて生ずるものだといふことである」と記されています。日本においても『万葉集』に越中の国守として赴任していた大伴家持が、天平勝宝2年（700）の正月の宴席で披露した「あしひきの山の木末こぬれの寄生取りて挿頭ほよしつらくは千歳かざ寿ぐとぞ」と千年の命を祝う和歌の中に寄生と書いて「ほよ」と詠んでいます。

薬としての利用も古く『神農本草経』の上品に桑上寄生の名で収載され「腰痛、小兒背強、癰腫を主る。胎を安らかにする。肌膚を充たす。髪・齒を堅くする。髭や眉を長てる」と記されています。前出の韓保昇は「必ず桑上のものを用ゐるが佳し」と述べ、大明（日華子諸家本草968-975）は「桑上のものは極めて少れだ」とも記していることから推測すると桑寄生と名づけられてはいますが、種々の樹木に寄生した物の総称として用いられてきたようです。日本においては、『延喜式』（927）の卷三十七典薬寮に阿波国から「寄生廿斤」が寄進されていることが記されています。江戸時代の本草書『大和本草』（1709）には「桑寄生を薬に用ゆ」とし、また『本草綱目啓蒙』（1803）に「桜、柳、朴（エノキ）、梨等の寄生、桑上の者と形状相同じく」とあり桑以外に寄生するヤドリギも用いていました。

西洋においてもセイヨウヤドリギ (*V. album*) が『ギリシア本草』（70）に化膿症の薬として用いることが記されています。また、幸せを運ぶ木として多くの神話に登場し、クリスマスの飾りにも用いられています。 (村上守一 記)